

下村 彰男

東京大学大学院農学生命科学研究科教授

### 社会システムとしてのエコツーリズムに期待

「日本型エコツーリズム」。推進会議そして幹事会において、初期段階から出てきていた言葉である。現在、日本で展開されつつあり、かつ期待されているエコツーリズム像は、1980年代以降、国際的な自然保護戦略の中で議論されてきたエコツーリズムとは、いささか異なっているという認識が当初から多くの委員にあったように思う。そして、会議での議論を私なりに解釈すると、国内で進めていくには、基本理念に対する深い理解のもとに、対象にしても進め方にしても、より広義に解釈し展開していくことが求められているという認識が共通していたのではないか。

エコツーリズムは、大きな時代の流れの中での「必然」として生まれ、位置づけられる概念であると考えている。したがってその基本的な理念には時代の要請が反映されているため、地域や立場によってそれぞれに期待を寄せることが可能となって、多様な様相を呈するものと考えられる。実のところ、エコツーリズムは時代のキーワードである「環境共生」「情報化」「国際化（ボーダーレス）」といった言葉に対応する側面を有している。

環境共生については言うまでもない。環境への低負荷、環境への理解の促進はエコツーリズムの最も分かり易い側面であり、環境との持続的な共生は依って立つ重要な柱である。また情報化という点に関して言えば、新しい観光としてのエコツーリズムの本質は「情報の付加」にあると考えている。近代における周遊観光のように、移動しながら単に非日常的な景観や体験を楽しむだけでなく、一つの地域にゆっくり滞在して、景観形成の背景や体験の意味に関する地域の自然、生活文化、歴史などの情報とセットで楽しむというものである。したがって提供サイドである地域は、地域の様々な情報をいかに収集し、魅力的に伝えるかがポイントとなる。その一端が、宝さがしやモニタリングであり、ガイド養成の問題である。そして、ボーダーレス化が進展するほど、地域のアイデンティティが求められるようになる。この点は、新しい景観法等において「地域個性」が強調されていることとも同一の流れであろう。地域の個性を磨くことによって地域の資源性を高め、そのことによって住民の帰属意識を高めるとともに、域外の人々を魅了し、地域づくりへの貢献をも促すというものである。

比較的限られた人々の楽しみであった漫遊や遊覧は、近代において「観光」として産業化した。今後の「エコツーリズム」は、地域の環境や社会を運営・管理するシステムとして機能するものと考えている。混迷の続く現代社会に、新たな交流型の社会像、ライフスタイル像を提供してくれるものと期待して関わっていききたいと思う。